

江戸末期に門前町のはずれで 酒造りを始め 伝統の老舗を守り続ける

夢のお告げから

成田で酒造りを始める

成田で醸造業を営んでいる老舗は二軒である。

その一軒である滝澤本家の初代滝澤栄蔵は、新潟県大潟町の半農半漁の村に生まれた。穀倉地帯の人々が江戸や諸国に出て酒造業を興し繁盛している姿をみて、栄蔵も酒造家を目指し、最初は江戸新川（現在の中央区新川）で著名な「大星」などのある酒問屋街で開業をした。そのうちに信心していた深川不動産の御縁から成田山へ参詣する機会も多くなり、夢でお不動様からお告げを受け、当地で酒造りを始めたところ、井戸水が大変おいしい良水である『との評判が広まった。不動尊参詣者がこの井戸水をくんで帰り、『病気が治った』『長生きした』など百薬の長であるとの話が寄せられたという。



滝澤徳次郎（たきざわ とくじろう）

滝澤本家の初代滝澤栄蔵は、江戸末期、成田のはずれで酒造りを始めた。井戸水が長生きにきくとの評判から「長命泉」と名づけた。二代目からは代々徳次郎を名乗り、門前町の老舗を守り続けている。（写真は三代目）

そこで、長命・延命霊力の酒といった意味を込めて『長命泉』と名付け（鈴木久仁直著「ちばの酒ものがたり」）ここで醸造業を始めた。

時代は江戸末期、栄蔵は当時賑わいを増してきた成田山新勝寺の門前で村のはずれに場所を定めた。酒造りという性格から近所に迷惑をかけたくないという心がけと広い敷地の確保ということからここを選んだといわれている。栄蔵は最初、今までの酒造業にはあき足らず、白フランチーの商開業や、横浜へ行ってビール製造の技術を学ん

だりして、事業家として幾つか醸造業の実験を試みたが、成功するところまではいかなかった。

滝澤本家の家紋(て)は 初代の妻でつづいて「から

こつて創業の苦勞をする栄蔵にとつて、つづいてという妻がこの上ない内助の力となった。初代の妻でつづいては夫の栄蔵がどちらかといえば研究家肌タイプの人間であったのに対し、「しっかり者のお内儀さん」といわれる人物であ



「水のお陰で病気が治った」と評判になった井戸

った。夫の郷里の新潟方面から来る酒造りの「杜氏」をこの上なく大事にして主人の醸造に励みを持たせる一方、販売も熱心で売れ行きが伸びるほどに酒の増石も進んだという。

面白い話は、この初代の妻でつづいてちなんで、滝澤本家の家紋ができ、番傘、印はんでんのマークはすべて丸の中に平仮名の「て」を書き①という印になっている。このことにもその「お内儀さん」の実力のほどがうかがわれるのである。また、栄蔵も創業の苦勞を共にした妻の努力を買ってそうしたこと認めた点では、現代の男女共同参画社会を先駆けしたような人物でもあった。

初代のあと、二代目徳次郎は文久3年の生まれで、豊住村北羽鳥の日暮甚左衛門の三女まつをめとり家業を継いだ。

二代目は堅業に家業を継いで、酒造業も順調に維持してきたが、50歳で早



表参道に店を構える滝澤本店

逝している。しかし、夫婦の間には男5人、女3人と8人の子ともが生まれていた。

長男栄太郎、長女えい、次女てる、次男栄亮、三男栄一、三女千代、四男七郎、五男八郎がそれぞれ独立したり、嫁いだり早逝したりした。

三代目徳次郎は 成田中野球部で活躍

二代目の長男栄太郎は、明治19年12月25日の生まれで、先代の名前を継いで三代目徳次郎と改名する。成田小学

校を経て、成田中学に入り、第3回（明治37年3月）の卒業生である。同期には18人の卒業生があり、公津村長を務めた小川源一郎、海軍少将になった飯倉貞造らがいる。在学中、徳次郎は野球部が創設されるやさっそく入部した。部員の一人であった藤崎綾三郎が「本校野球部の創立は明治33年のことで、茂原農業、佐倉、佐原中学と前後して野球部が創立され、初代部長は後年大丸百貨店の社長となった里美純吉であり、第一回卒業の元成田町長飯倉文甫、第二回の元海軍少将飯倉貞造、田中重衛、那須文治、木内茂助、滝澤徳次郎らであった」（成田高校野球部史）と書いている。

もっとも成田中学野球部で活躍したのは次男の栄亮、三男の栄一でもあった。栄亮は明治44年には三塁手として活躍、大阪高工卒業後、母校の部長となつて後輩の指導に当たっている。栄一（第15回卒業生）は、大正3年に遊撃手としてさらに翌年には主将として活躍している。

滝澤兄弟の野球部創設期の功績に今でも選手達が甲子園を目指す大会出場前に滝澤家の墓参をすることを慣例としているという。

徳次郎は卒業後家業を継いで、明治42年12月、20歳のとき、梅屋旅館主小泉栄助の三女照と結婚する。

しかし、徳次郎は家業に精を出したものの健康がすぐれず兵役を果たした。後、昭和2年2月、43歳で早逝する。当時、長男利一は18歳、次男清は13歳であった。妻の照にとつては、大変な試練の生活となった。

幸い、徳次郎の弟の栄亮がニッカウヰスキーの創始者竹鶴正孝と大阪高工（現在の大阪大学の醸造科）の同級生であったことも幸いして、友人としてさまざまな面での力を借りることができた。

加えて、照が、初代でつに次いで滝澤本家の女丈夫として夫なき後の家業に預かった力は大きいものがあつたといわれている。伝統ある門前町の老舗の経営を何代も続けていくことは容易なことではないが、そこには経営者はもとより、妻の力、一族の結束が何よりの力であった。

三代目徳次郎のあとは、長男利一が四代目徳次郎となった。四代目は、読書好きでどちらかといえば学問好きなタイプの人間であった。しかし、この徳次郎には子どもがなく弟清の長女昌江が養女となった。

花咲町の大火で 酒造蔵を焼失

滝澤本家にも家業を継承していく上

で思いがけない災難もあった。三代目の早逝に次いで、四代目の時代、昭和20年5月9日、花咲町（現花崎町）の大火に遭った。

「この夜は無風でしたが、次々と燃え広がって、11日の明け方に鎮火したときには、花咲町大通りの商店街、新道通りの民家など大部分が焼失してしまいました。この大火による罹災世帯数は実に184」と記されている。〔目で見える成田の歴史散歩〕昭和54年5月1日号）

この火事とき、滝澤本店の蔵はほとんど焼失し、消火に出動した軍隊が本店井戸場の小屋をこわして類焼を防ぐ手だてとしたといふ。

このとき、徳次郎は兵役に従軍しており、母の照、妻の淑子、実弟の清が家業を守っていた。

しかし間もなく、徳次郎も兵役を終えて帰郷し、一家が力を合わせて火災後の復興に当たった。

滝澤本店はこうして、五代目当主尚二の時代を迎える。

滝澤本店のある上町は、今では門前町の中心部に位置する所となった。

成田の代表的な醸造業の老舗が町の中心部にあるといふことは、門前町の伝統を風格つける、顔としてその役割も大きいものといえよう。

（文中敬称略）